



街並みや暮らしの変遷とともに
大きな発展を遂げた昭和の札幌。
その一場面に居合わせた方に、
思い出の旅へと
案内してもらいましょう。

第八回 さっぽろ雪まつり

今回のご案内役は：渡辺 信さん（札幌国際情報高校講師）

故岡本太郎氏とともに造りあげた
第30回記念の大雪像「雪の女神」

私が雪像造りに出会ったのは、伏見高校（現札幌工業高校）の二年のときだ。授業の一環として行われた屋外活動で、第四回（昭和二十八年）の大雪像「昇天」の制作に全校生徒で参加した。雪運びから雪積み、雪踏みとすべて手づくりだった。その後、母校である札幌工業高校の教壇に立つようになってから、生徒たちに呼び掛け、雪像造りを再開した。

これまで、「北国の生活」「北国の詩」「タイムトンネル」のほか、昭和三十七年の第十三回には、自衛隊と共同で大雪像「横綱大鵬の土俵入り」を制作。その後も、「子供列車」ある日の猫ジャラ

市「五条大橋」動物のオリンピック「私たちの城」「太陽とペガサス」と、たくさんの雪像制作に携わってきた。



上：高さ12メートルの「雪の女神」の前で話す岡本さん（右手前）と渡辺さん（左）
左：“雪”という素材に合わせ、デザインの変更を快く承諾してくれた岡本さん。自らも雪像制作に加わった

昭和五十三年、雪まつり実行委員会は、大阪万博の「太陽の女神」をデザインした故岡本太郎氏（以下T.A.R.Oさん）に、三十回記念としてシンボルとなる大雪像のデザインを依頼。私は、十月中旬ころ、実行委員会よりその制作を委嘱された。

出来上がってきた大雪像「雪の女神」の模型を見て、困ったことがあった。雪の素材を理解されていたのフォーム（形態）だろうか、両腕のバランス、胸の膨らみなど上半分の比重が大きかったため、制作するにはしんに多量の鋼材が必要だった。そこで、下のスカート部分をなくして安定感を高める、両腕は二つの雪山で支えるなどの腹案を持って、東京都港区南青山にあるアトリエを訪問した。熱帯植物園を模した部屋の左右には、表情豊かで攻撃的アクシヨンスタイルの、T.A.R.Oさんのろう人形が二体置かれてあり、この異様な雰囲気は倒させられた。その中、雪の素材の特質などについて説明したところ、T.A.R.Oさんはすべてを快く聞いてくれた。

帰り道、二、三分だろうか、坂を下ったところで、「おい、おい」という声が耳に。振り返ると、小柄なT.A.R.Oさんが小走りで追い掛けてきた。荒縄で縛った四十五センチほどの「太陽の女神」の顔の模型を、参考にと届けてくれたのだ。同じ「ものづくり」をする者への心遣いが、とてもうれしかった。



雪像制作の大詰めを迎えた一月下旬、T.A.R.Oさんが来札され、制作に加わった。「女神の目をくりぬけば、そこから青空が見えて面白い」と主張された。この一言が強烈に

開催の前に、T.A.R.Oさんには、天候の異変もあることを理解していただいた。一夜雨になりはしたが、感謝しか自宅に電話をくれたこともうれしかった。今ではすべてが懐かしい思い出だ。